

# 令和5年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【川通中学校】

⑥ 次年度への課題と改善策	
知識・技能	川通中チャレンジカップ(KcC)を今年度同様、每学期5教科で実施する。今年度は、KcCで定期テストの類似題を出題した教科もあった。生徒が意欲的に取り組み学力向上に直結するテストとして、一層の活用を図りたい。また、今年度効果があった「基本事項の繰り返し指導」や「小テスト」、「授業の振り返り」等を教員が意識して、授業の工夫改善を進めることを進めたい。
思考・判断・表現	今年度の分析で、本校生徒は、「思考・判断・表現」の力に特段課題があるわけではないことが明らかになった。今年度の策にあった「実態に合った課題設定」、「自分自身で解決する経験」に似た実践を行った教科に成果が見られたことから、この策を広げていくことがよいと考える。また、「グラフや表からの読み取り方」、「考察など考えをまとめる文章の型」等を具体的に教えることも必要であろう。
主体的に学習に取り組む態度	質問紙調査から、「自分で考え、自分から取り組む」等、数項目で本校平均は市を上回っており、潜在的に「主体的に学習する態度」を持ち合わせていることがわかった。この良さを基に、「一人一台端末の活用」をさらに進めること、授業の中で「教え合う・学び合う」等のアクティブラーニングを数多く設定すること、などにより、さらなる磨き、主体的に学ぶ態度を育てていきたい。そして、本校の良さである「和やかな雰囲気」を大切に教科指導に当たっていきたい。

① 目標・策		
	目標	策
知識・技能	多様性への理解や主体性、問題解決能力を育成するために必要不可欠な「知識・技能」を高める。	⇒ 各教科の授業において、基本的な「知識・技能」に関する指導を繰り返す。 国語・数学・社会・理科・G・Sにおいて、川通中チャレンジカップと題した中テストを每学期1回実施する。
思考・判断・表現	自分の考えを構造的に整理したり、法則性を見出したり、物事の結果を予想したりする力を高める。	⇒ 生徒の実態に合わせた課題を設定し、自分自身で解決できたという経験を重ねられる授業を展開する。 生徒が思考・表現を進めやすくするため、文章の型を指導する。
主体的に学習に取り組む態度	学習に興味や関心をもち、粘り強く取り組む生徒を育てる。学習活動を振り返って、次の学習につなげられる生徒を育てる。	⇒ 一人一台端末の活用を図る。 役割を分担して学習を進めたり、教えあったり、考えを述べあったりする活動を授業に数多く取り入れる。誰もが安心して学ぶことのできる集団を育成する。

次年度に向けて (3月)

目標・策の設定 (4月)

年度末評価

⑤ 目標・策の達成状況		評価(※)
知識・技能	全学年・全教科で、学期ごとに「川通中チャレンジカップ(KcC)」と題したテストを実施した。また、教科によっては、毎時間の振り返りを丁寧に行い、「知識・技能」の定着に努めた。その結果、第2学年では、「知識・技能」の得点が、3教科で市平均を上回った。	B
思考・判断・表現	全体成績と思考・判断・表現の市と学校の差は、いずれも少し市平均を下回った結果であった。このことから、本校生徒の思考・判断・表現の力が、特段不足していることではないことがわかった。文章の型を指導したり、生徒が課題を設定し、自己解決を促したりした学年教科では、若干良い結果が得られた。	B
主体的に学習に取り組む態度	質問紙調査の結果の市平均との比較では、「自分で考え、自分から取り組む」+5ポイント、「自分の考えを深めたり、広げたりできる」+5ポイント、「学んだことを他の学習に活かしている」+4.5ポイントであった。本校生徒は、主体的に学習に取り組む姿勢が高いと考えられる。しかし、策としてあげた「端末の活用」は、質問紙の結果全学年で市平均を大きく下回っており、不十分であった。「教え合いや安心して学べる集団の育成」については、ある程度達成できたと考えている。	B

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(概ね達成) C 6割未満(あと一歩)

② 全国学力・学習状況調査結果・分析	
知識・技能	国語:「我が国の言語文化に関する事項」は、昨年度も本校の課題で、特に「歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直す」設問は正答率が低かった。日常生活で古典に触れる機会が少ないせいか、授業で積極的に学ぼうとする姿勢を示す生徒が多くない現状がある。 数学:「図形」や「関数」に関する基礎を十分身に付けている生徒が多くない現状がある。「数と式」については、十分達成できており、決して数学すべてが不得意なわけではない。生徒の苦手分野を意識した指導が必要である。 英語:4年前の自校結果と比べ、「学習指導要領の領域」が、全項目で下回っていた。基本的な単語や文章が、身につけていないと思われる。
思考・判断・表現	国語:昨年度の本校の結果に比べ、「読むこと」は向上が見られた。「話すこと・聞くこと」は、達成率が低下していた。 数学:昨年度の本校の結果に比べ、大幅に低下していた。「図形」や「関数」の基礎的な力が十分ついていないようである。また、グラフや図形に関する設問の無解答率が高いことも明らかになった。 英語:本校4年前は、「外国語表現の能力」が、比較的良好であった。今回は、単純比較はできないが、4年前を下回る結果となった。
主体的に学習に取り組む態度	「生徒質問紙」による調査で、主体的に学習に取り組む姿勢が感じられた。例えば、設問41「学習した内容を次の学習につなげている」や設問42「学んだことをほかの学習に生かしている」では、肯定的な回答が多かった。 また、「国語の学習が好き」「数学の学習が好き」は、県平均・全国平均と比べ、肯定的な回答が多かった。普段の授業でもクラス全体が真面目に取り組んでおり、学習態度は良好である。課題としては、家庭学習の時間が短いことである。改善を図りたい。

- ①結果分析(管理職・学年主任等)
- ②詳細分析(学年・教科担当)
- ③分析共有(児童生徒の実態把握)

④ さいたま市学習状況調査結果・分析	
※令和5年度のさいたま市学習状況調査結果は、参考値扱いとする。	
中1	国語は、4科の中で最も市平均に近い結果であった。特に、書くこと、言語文化に関する設問は、市平均を2~5ポイント上回る正答率だった。定期テストのたびに、課題作文を出題したり、単元の振り返りで文章を書かせたりしたことが、この結果に結びついていると思われる。一方、ある教科では、生徒がその教科を「好きでない」と答えた割合が、半数を超えたものがあった。その教科は、市平均と比べた正答率も相当程度低かった。教科が好きかどうかは、学習意欲に直結すると思われる、大きな課題である。
中2	2教科で、市平均を上回り、ほぼ市平均と同等の結果であった。国語では、書くこと及び読むことが、市平均を4~5ポイント上回っていた。小学校や1年時での指導もあり、書くことに抵抗のない集団であったことも一因であるが、授業で「自分の考えを発言したり、ノートに書いたりさせて、考えを言葉に置き換えること」を続けてきた結果と思われる。また、正答率が高かった理科では、「話し合い活動」や「PCを活用した意見交換」等のアクティブラーニングを取り入れた授業を行っていた。さらに、形成的評価を毎時間必ず実施して、生徒の意欲を高める工夫をしていた。
中3	3回の市テストとも市平均に及ばない結果であった。ただし、特定教科の特定学年に関する設問では、市平均を超えているものが複数あった。「重要事項を繰り返し説明」したり、「小テスト」を行ったり、基礎的な知識・技能に重きを置いた結果と考えられる。また、全体として正答率が低迷した理由に、質問紙での設問「自分には良いところがある」が、市平均を13ポイント、「授業中、先生に聞くことができる」が、同5ポイント下回っていることに注目したい。

③ 中間期見直し(全国学力・学習状況調査結果分析後)		
	目標	策
知識・技能	変更なし	⇒ 変更なし
思考・判断・表現	変更なし	⇒ 変更なし
主体的に学習に取り組む態度	変更なし	⇒ 変更なし